特別講演

I g E の今昔物語 新家 莊平 (兵庫医科大学)
The history of studies on immunoglobulin E. SHINKA, S.

レアギンと呼ばれていたアレルギー発症因子の本体が初めて明らかにされ、I g E と命名されたのは 1960 年代の半ばであるが、それを契機として、アレルギーの発生機序や I g E 産生機構の研究は新しい免疫学の潮流に乗って急速な進展を遂げてきた。

本講演では、これら I g E 研究の変遷の歴史を概説したあと、演者の教室におけるサイトカインを中心とした線虫感染実験からの成果—Th₁ 型ヘルパー T 細胞の分化や B 細胞の I g E 産生誘導に必須のサイトカイン IL-4 の作用機序、IL-2 やサイクロスポリン A の I g E 産生抑制機序、先天性低 I g E 産生動物における I g E クラス特異的抑制性胸腺外 T 細胞や Th₁ 型ヘルパー T 細胞の誘導に重要な役割を演じるユニークな T 細胞の存在などに関する新しい知見—を紹介しながら、昨今の I g E 産生・調節機構に関する研究の進展について触れてみたい。

2 能登半島のマダニ刺症とマダニ媒介性疾患に関する調査 (その 3) ○ 及川 陽三郎・池田 照明 (金沢医大・医動物)・高田 伸弘・矢野 泰弘 (福井医大・寄生虫

Epidemiological surveys of human tick bites and tick-borne diseases in the Noto Peninsula (3).

Oikawa Y., Ikeda T., Takada N. and Yano Y.

演者らは 1993 年より能登半島でマダニに関する基礎調査を行ってきた。マダニの採集地域として本年新たに鉢伏山、別所岳および宝達山を加え、採集されたマダニ総数は累計で 264 匹となったがマダニ種は依然として 2 属 4 種と少なかった。今回採集したマダニ 20 匹の BSK 培地による培養では、別所岳で採集したヤマトマダニ雄成虫より血清学的に *Borrelia japonica* と思われる 1 株が分離された。しかし能登半島で捕獲された野鼠 11 匹 (アカネズミ) の耳介の培養では、ボレリアは分離できなかった。また *B. japonica* H014 株を用いた IP 法でも野鼠の血清抗体価は 11 例全例で低かった ($\times 80$)。一方、*Rickettsia japonica* 青木株を用いた IP 法では 82% (9 例) の野鼠が高い抗体価 ($\times 2,560$) を示し、更に *Francisella tularensis* Schu 株を用いた MA 法では 9% (1 例) が $\times 10$ (陽性) を示した。

一般講演

1 堺市内公園砂場におけるダニ相 ○ 吉田 永祥・齋 輝久 (堺市衛研)・米本 申一・福永 昭廣・西尾 恭好 (大阪市大・医・生物研) The mite fauna in the sandpits of public parks in Sakai city, Japan. H. YOSHIDA, T. SONO, S. YONEMOTO, A. FUKUNAGA & Y. NISHIO

公園砂場における寄生虫卵調査時にダニが検出された。その実態を明らかにするため、堺市内の公園 167 所の砂場を 1992 年 4 月から 1993 年 3 月の 1 年間、毎月 1 回調査した。その結果、全砂場合計で 30 科 2571 個体のダニを検出した。

半数以上の月、砂場で検出されたツブダニ類、コシボソダニ類、ヒナダニ類、ハネトビダニ類は一般的に公園砂場にも棲息するダニであることが新たに分かった。又、砂場別では半数以下の検出数であるが、月別では年間の半分以上の月で検出された種類、*Sancassania* sp., オトヒメダニ類、マドダニ類、ゴミコナダニ、ヒワダニ類、クワガタダニ類、ダルマヒワダニ類、ヒメハダニ類、*Tyrophagus* spp., イトダニ類はその砂場個々の環境により、棲息可能なダニであると考えられる。

ゴミコナダニは砂 50g から 1588 個体検出されアレルギーとして問題を生じる可能性を示唆している。

ヒナダニ類と犬、猫回虫卵の間に有意な相関が、又、公園面積と検出ダニ数の間には有意な逆相関が認められた。

3 外耳道マダニ寄生例 ○ 初鹿 了 (川崎医大・寄生虫)・兵 行孝 (倉敷市・兵耳鼻咽喉科医院) A human case of ear canal infestation with a hard tick found in Okayama Prefecture R. Hatsushika & Y. Hyo

患者は倉敷市徳芳在住の主婦 (45 歳)。1995 年 7 月 8 日、患者は左耳閉感と左聴覚異常を訴えて兵耳鼻咽喉科医院を訪れた。患者は同年 6 月末頃に左耳閉感を自覚したが放置し、来院前日に自身で耳掃除した際に黒褐色の耳漏を認めた。耳鏡検査所見では、左軟骨部外耳道後下方に黒褐色を呈した球状の異物が存在し、耳垢鉤によりこの異物を摘出した。外耳道皮膚には少量の出血と糜爛が認められたが、骨部外耳道および鼓膜には異常を認めなかった。摘出した異物は直径約 8 mm で、4 対の歩脚と 1 対の気門板を有し、マダニの 1 個体と思われた。マダニは 10% KOH 液で煮沸後、封入標本としてその形態を精査した結果、口下片・触肢・各歩脚基節の棘・気門板などの特徴からフタトゲチマダニ (*H. longicornis*) の雌成虫と同定された。マダニ摘出により患者の聴力は回復し、マダニ咬着局所の外耳道皮膚はリンデロンVG軟膏塗布によって約 2 週間後に完治した。現在まで発熱・発疹などの全身症状は出現していない。患者は、飼い犬を連れてよく山道を散歩している。本症例は、岡山県におけるマダニ刺症の第 22 例目である。